大和総研
Daiwa Institute of Research

2021 年 2 月 4 日　全 6 頁

コロナ禍で変容した世界貿易

感染症対策・在宅勤務特需で世界輸出総額における中国シェアが拡大

経済調査部　エコノミスト　小林 若葉
エコノミスト　岸川 和馬

［要約］

■ 2020 年の世界の財貿易は、新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う世界各国のロックダウン等によって大きく縮小した。一足早く経済活動が再開された中国では各国の生産を代替したことなどにより、世界の輸出総額における中国シェアは大幅に高まった。多くの国では供給体制が回復傾向にあるものの、中国のシェアは感染拡大前より 2%pt ほど高い水準を維持している。

■ 米欧では主に航空機関連製品が輸出額の減少に寄与した。半面、中国においてはマスク等の感染症対策に関連する財や在宅勤務に不可欠なパソコンなど、コロナ禍で特需が発生したとみられる品目が輸出の拡大に寄与した。中国の感染症対策関連財輸出はこのところ緩やかに減少している一方、パソコンやその周辺機器は底堅く推移している。在宅勤務等のテレワークの拡大・定着などを背景に中国の同品目の輸出は底堅さを維持し、輸出全体を下支えするだろう。

■ 日本の輸出額も欧米ほどではなかったものの、印刷機や航空機関連製品を中心に輸出額が減少した。日米欧においてコロナ禍で減少した品目の輸出は、ワクチンの普及で新規感染者数の明確な減少が見られるようになれば回復基調が強まり、輸出全体の底上げにつながろう。

大和証券グループ　　株式会社大和総研 丸の内オフィス　〒100-6756 東京都千代田区丸の内一丁目 9 番 1 号 グラントウキョウノースタワー
このレポートは投資勧誘を意図して提供するものではありません。このレポートの掲載情報は信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。また、記載された意見や予測等は作成時点のものであり今後予告なく変更されることがあります。㈱大和総研の親会社である㈱大和総研ホールディングスと大和証券㈱は、㈱大和証券グループ本社を親会社とする大和証券グループの会社です。内容に関する一切の権利は㈱大和総研にあります。無断での複製・転載・転送等はご遠慮ください。

1. 2020 年に起きた世界貿易の構造変化

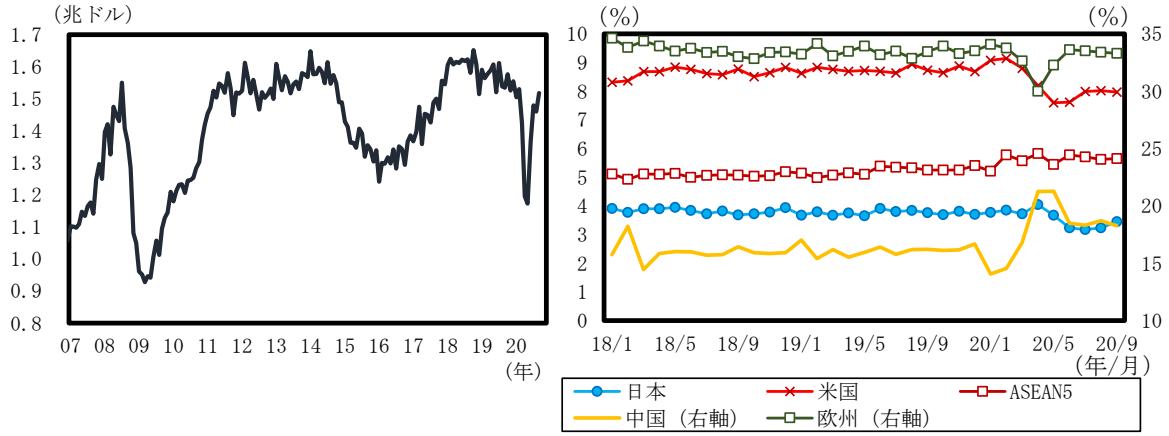
世界の財の貿易量が減少する中で中国の輸出シェアは拡大

2020 年の世界の財貿易は、新型コロナウイルスの感染拡大によって大きく縮小した。世界の輸出総額（名目輸出ベース、大和総研による季節調整値）は 2020 年 3 月から 5 月のわずか 3 カ月間で 23%の落ち込みを記録した（**図表 1 左**）。リーマン・ショック時は 8 カ月間で▲40%であったが、年率で見ると今般のショックによる落ち込みの方がやや大きく、世界貿易が急速に縮小した様子が見て取れる。2020 年春には感染拡大防止策として各国でロックダウン（都市封鎖）が実施された。人の移動制限や工場の稼働停止などを受けた供給制約や消費等の需要減少により、各国の輸出は大きく減少した。もっとも、経済活動の再開後に世界貿易が急速に回復したことも今回の特徴であった。リーマン・ショック時はショック前の水準を回復するのに 2 年 9 カ月かかったのに対し、コロナショックでは直近値の 2020 年 9 月までに落ち込み幅の 96%を回復した。

世界の輸出総額の水準はコロナショック前に近づいた一方、その中身には変化が見られる。すなわち、世界の輸出総額における国別のシェアは感染拡大を受けて大きく変化した（**図表 1 右**）。とりわけ輸出額シェアが変化したのは中国である。中国では 2020 年初からロックダウンが実施されたのに伴い輸出シェアは一旦低下したものの、欧米などもロックダウンに踏み切った 4 月以降の輸出シェアは顕著に拡大した。その後は多くの国で経済活動の再開が進み、供給体制が回復傾向にあるものの、中国のシェアは感染拡大前より 2%pt ほど高い水準を維持している。

以下では、こうした状況の中で中国の輸出が「一人勝ち」の様相を呈した背景を探るとともに、変容した世界貿易が日本に与える影響を考察する。

図表 1：世界の輸出総額（左）と世界の輸出総額における国別シェア（右）



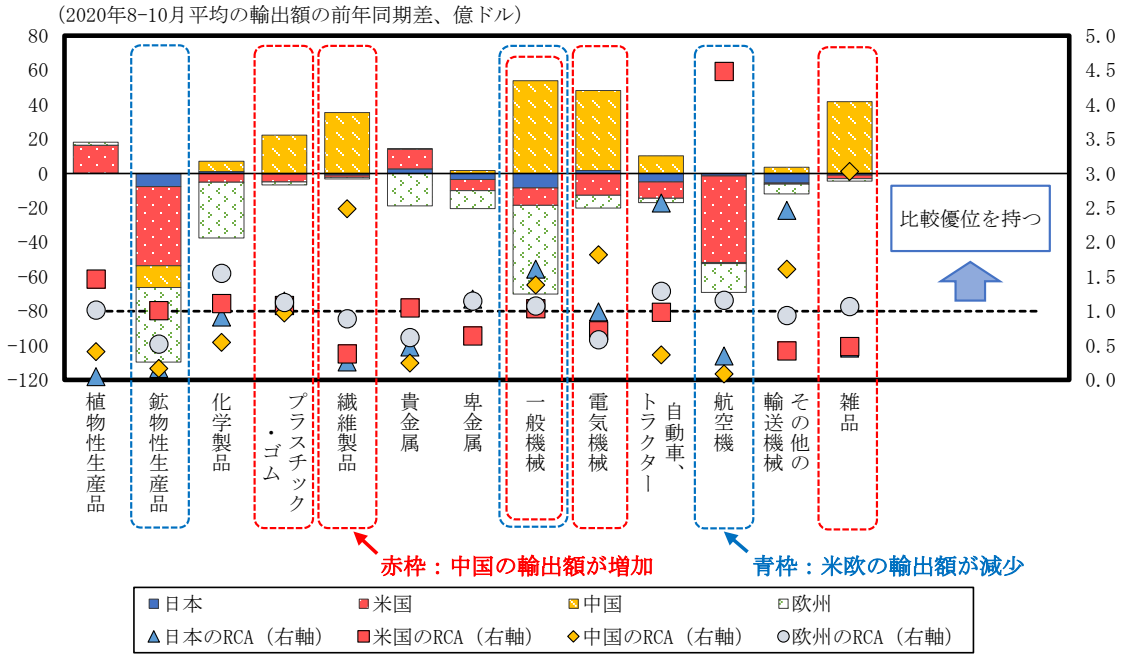
（注）大和総研による季節調整値。欧州はEUと英国。中国は香港を含む。ASEAN5はインドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ベトナム。
（出所）IMF統計より大和総研作成

中国の国際競争力の高い財への需要がコロナショック後に増加

コロナショック後に変化した世界貿易の特徴を整理するため、日本、米国、欧州（EU と英国）、中国における主要品目の輸出額について 2020 年 8～10 月平均の前年同期差をとったものが**図表 2** の棒グラフである。これを見ると、米欧では主に鉱物性生産品や一般機械、航空機の輸出額が減少している。鉱物性生産品の輸出額減少に大きく寄与したのは鉱物性燃料であり、旅客便需要の急減などを背景に欧米の燃料輸出が落ち込んだ。また、欧州の一般機械ではガスタービンを中心に押し下げており、航空機関連製品の需要の減退が影響したようだ。日本では鉱物性生産品や一般機械が輸出額の減少に寄与しているものの、米欧に比べると押し下げ幅は限定的である。他方、中国では電気機械や一般機械のほか、繊維製品やプラスチック・ゴム、雑品など幅広い品目が輸出額を押し上げたことが分かる。

こうした輸出額の変化を各国・地域の国際競争力と紐づけて見てみよう。**図表 2** の右軸では 2019 年の輸出額を用いた顕示的比較優位指数（Revealed Comparative Advantage Index：RCA）を示している。RCA とは、各国・地域の輸出の、世界平均と比べた品目の偏りを示したものである。各国・地域において RCA が 1 を上回る品目は比較優位を持つことを示す。米国は需要が大きく減少した航空機で比較優位を持ち、欧州も航空機や一般機械など需要が減少した品目で比較優位を持つ。他方、需要が増加した繊維製品や電気機械、雑品では中国が比較優位を持っており、その他の国・地域に大きく水をあけている。

図表 2：各国・地域における主要品目の輸出額の変化と 2019 年の顕示的比較優位指数（RCA）



（注1）輸出額の変動が見られた主な品目。欧州はEUと英国。
（注2）顕示的比較優位指数＝各国の輸出総額に占めるi品目の割合／世界の輸出総額に占めるi品目の割合。世界の輸出額はUN Comtradeでデータが利用できる131カ国・地域ベース。
（出所）各国統計、UN Comtradeより大和総研作成

総じて見れば、コロナ禍では米欧が比較優位を持つ品目で需要が減少し、中国が比較優位を持つ品目で需要が増加したのが特徴であったといえよう。このため感染拡大後の米欧の輸出総額は減少しやすく、反対に中国の輸出総額は増加しやすくなり、結果として中国と米欧の輸出額シェアの差が拡大したと考えられる。

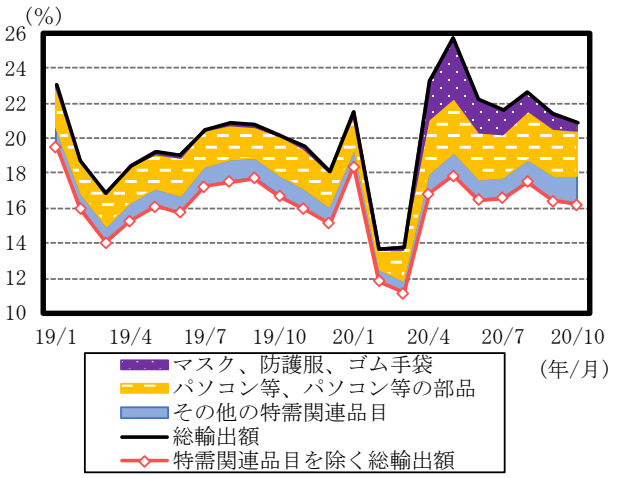
中国の輸出シェア拡大はコロナ禍で生じた特需が大きく寄与

前掲図表 2 で示したように、国際競争力の高い品目で需要が増加したことが中国の輸出シェアの拡大に寄与した。これらの品目を詳細に見ると、マスク等の感染症対策に関連する財や、在宅勤務に不可欠なパソコンなど、コロナ禍で特需が発生したとみられる品目が主であった。これらを除いて見ると、中国のシェアは 2019 年と同程度の水準にとどまる（**図表 3 右**）。

主要国の輸出総額に占める中国の輸出額の割合を**図表 3 左**で掲載した「特需関連品目」とその他費目に整理すると、2020 年 4～6 月はとりわけマスクや防護服、ゴム手袋など感染症対策関連財が中国のシェアを押し上げた。また在宅勤務等のテレワークの拡大を背景に、パソコン等の押し上げ幅が感染拡大前に比べて拡大したことも見て取れる。そのほか、蓄電池やマイク、ヘッドホン及びイヤホン、モニター及びプロジェクターといったパソコンの周辺機器や、ビデオゲームといった巣ごもり需要関連財など、その他の品目も押し上げに寄与した。コロナ禍で発生した特需に中国が応えた形となったといえよう。

図表 3：中国のシェア押し上げに寄与した特需関連品目（左）と特需を除いたシェアの推移（右）

品目		2020年8～10月輸出前年同期比（%）
プラスチック・ゴム	ゴム手袋	285.9
繊維製品	マスク	453.3
	防護服	721.6
一般機械	パソコン等	20.0
	パソコン等の部品	8.5
電気機械	蓄電池	18.4
	家庭用電気機器	28.6
	マイク、ヘッドホン及びイヤホン	18.7
	モニター及びプロジェクター	1.5
	半導体デバイス（LED等）	11.2
雑品	ビデオゲーム	12.0



（注）データの制約から、ここでは輸出額シェア＝（中国の日米欧向け輸出）／（中国の日米欧向け輸出＋日米欧の世界向け輸出）とした。欧州はEUと英国。
（出所）各国統計、UN Comtradeより大和総研作成

2. 世界貿易の変容が日本に与える影響と世界貿易の先行き

米欧中の輸出額の増減による日本の中間財輸出への影響はネットでプラス

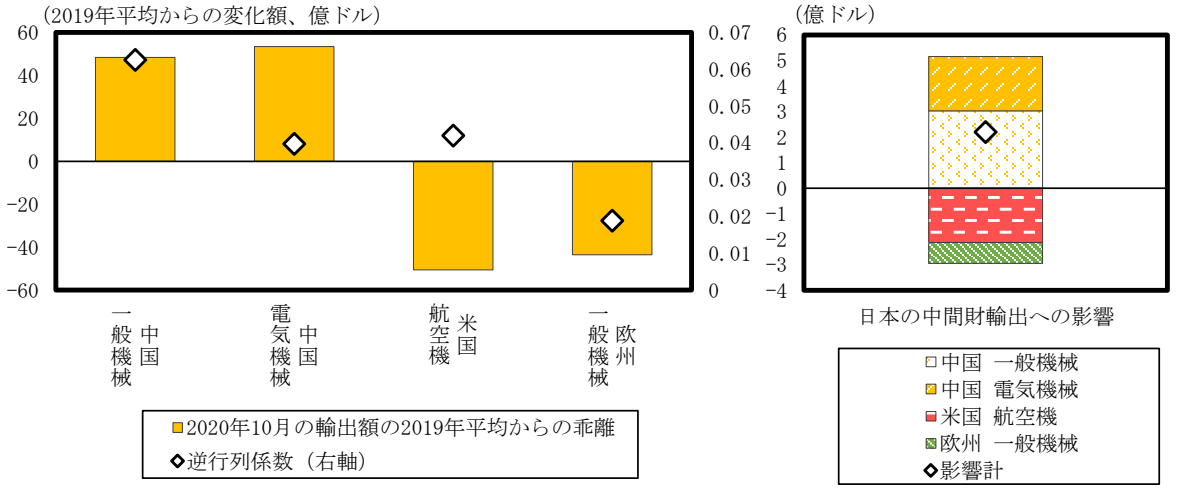
前章ではコロナ禍による国際貿易の変容に焦点を当てたが、本章ではこうした動きが日本の輸出に及ぼした影響について考察する。

上述のように、コロナ禍を通じて欧米の輸出は減少し、中国の輸出は堅調に推移した。こうした変化は各国・地域の中間財需要の増減を通じて日本から各国向けの中間財輸出に影響を及ぼしたとみられる。そこで国際産業連関表を用いてその影響の大きさを明らかにしよう。

前掲図表 2 で示したように、主要国・地域において輸出額がとりわけ変化したのは中国の一般機械と電気機械、欧州の一般機械、米国の航空機であった。2020 年の 10 月における中国の当該品目の輸出額は 2019 年平均をそれぞれ 50 億ドル程度上回り、米欧ではそれぞれ 45 億ドル程度下回った結果、ネットで見ると 8 億ドルのプラスであった（**図表 4 左**）。他方、ある品目の需要が 1 単位変化したときに日本の中間財需要が何単位変化するかを意味する逆行列係数の大きさを比較すると、中国の一般機械（コンピュータ、電子部品等）の係数が最も大きく、欧州の一般機械の係数は最も小さい。米欧中の主要輸出品目の変化額に逆行列係数を乗じて足し合わせると、日本の中間財需要への影響は＋2.2 億ドルとわずかながらもプラスであった（**図表 4 右**）。特に中国の一般機械の押し上げ幅が大きく、日本のコンピュータの部品や集積回路の需要が増加したと推察される。

ここでは日本の中間財輸出への影響を取り上げたが、各国・地域の輸出額の増減は各国・地域の設備投資需要を変化させ、日本の資本財輸出に影響を与えたとみられる。国際産業連関表ではこうした動きを捉えることができないが、資本財輸出が回復傾向にあることを踏まえると、中間財輸出と同様にプラスの効果が表れた可能性がある。

図表 4：2020 年 10 月の米欧中の主要輸出品目の変化額（左）と日本の中間財輸出への影響（右）



（注）大和総研による季節調整値。中国の一般機械輸出額の変化はパソコン関連が主であったため、逆行列係数の業種はコンピュータ・電子製品に対応させた。米国の航空機は自動車を除く輸送機械の逆行列係数を対応させた。
（出所）WIOD、UN Comtrade、各国統計より大和総研作成

先行きの中国シェアは幾分縮小、日米欧の輸出はワクチン普及で一層の回復見込み

2021 年の中国の輸出シェアは幾分縮小するだろう。足元では中国のマスク等の感染症対策関連財の輸出額が減少している。各国・地域において同製品の生産が増加し、中国への依存度が低下してきたとみられる。またワクチンの接種が広がり、感染拡大リスクが低下するにつれて、中国の輸出額を押し上げてきた感染症対策関連財への需要は一段と減少すると予想される。一方で、パソコンや周辺機器の輸出は堅調に推移しており、中国の統計では 2020 年 12 月の同品目の輸出額の増加ペースが加速した。テレワークの拡大・定着などを背景に中国の同品目の輸出は底堅さを維持し、輸出全体を下支えするだろう。

日本に関しては、**前掲図表 2** で確認したようにいくつかの品目の輸出額は若干落ち込んだものの欧米ほどではなかった。輸出額の減少に寄与したのは鉱物性燃料を中心とした鉱物性生産品や一般機械などである。このうち鉱物性燃料は、日本の輸出全体に占めるウエイトは小さいものの、旅客便需要の急減から大幅に減少した。一般機械ではとりわけ印刷機やガスタービンが減少しており、在宅勤務の拡大による法人向けのプリンターの需要減少や旅客便需要の減少が寄与したとみられる。その他の多くの品目では輸出額に大きな変動が見られなかったが、各国・地域の輸出額の増減が日本の中間財輸出に与えた影響は軽微であったことも、日本の輸出額に大きな変動が見られなかった要因の一つであろう（**前掲図表 4**）。

2020 年夏以降、日本の輸出の牽引役は自動車関連などの輸送機械であったが、足元では情報関連財、資本財が押し上げに寄与している[1]。各国の設備投資が回復する中で、こうした財の輸出が増加しているとみられる。機械類の輸出に先行する機械受注の外需は堅調な回復基調にあるため、資本財を中心とした機械類の輸出の増加傾向は継続するだろう。他方、米欧で輸出額が減少した航空機関連製品のほか、日本においてコロナ禍で減少した上述の品目や、**前掲図表 4** で確認した米欧の輸出減少の影響を受けた品目の輸出については当面弱含むことが予想される。だがワクチンの普及で新規感染者数の明確な減少が見られるようになり、多くの国で経済活動の正常化が進めば、こうした輸出品目の回復基調が強まり輸出全体の底上げにつながろう。

グローバルサプライチェーンの観点からは、2020 年初の中国のロックダウンの影響で部材の調達や医療製品の確保などで大きな混乱が起こったことから、中国に大きく依存する生産体制が問題視されるようになった。各国企業はサプライチェーンの分散化や国産化の必要性を認識したが、コロナ禍ではむしろ中国への依存度が高まった。中長期的には、こうした課題への取り組みによる貿易構造の変化が表れると考えられる。

[1] 詳細は鈴木 雄大郎「2020 年 12 月貿易統計」（大和総研レポート、2021 年 1 月 21 日）を参照。